平成 ２１年度第１回宇都宮市冒険活動運営協議会会議議事録

〇日時　平成 ２１年 ９月 １６日（水） １０：００ ～ １２：００
〇会場　宇都宮市冒険活動センター　会議室
〇出席者氏名
・小林利明委員　・神長信夫委員　・佐藤ハツエ委員　・森川澄子委員　・古口倭子委員
・遠藤 忠委員(会長)　・沼尾順市委員　・川口静夫委員　・五十嵐市郎委員　・若林秀世委員
・入江尚見委員
（事務局）　塩田雅明所長，海老原勝副所長，稲澤正明指導主事，佐藤洋美指導主事
〇公開　（傍聴者の数　０人）
１　開　　会
２　会長あいさつ
３　委員紹介
４　役員選出
　会長：遠藤忠委員，副会長：小林利明委員
５　議題
⑴　報告事項
①　平成 ２０年度事業報告について・・・資料　1
事務局　：　（資料にそって説明）
議　長　：　報告事項の１の学校受け入れ事業について説明をいただきました。質問がありましたらお願いします。
小林委員　：　学校が活動しているときの事故の発生状況について教えて欲しい。
事務局　：　体を動かす活動が中心になるので，けが等はある。保健室があるのでそちらで集計をしているが，詳しい数字については，資料には載せていない。擦り傷，切り傷，捻挫などは頻繁にある。昨年度については救急車を呼ぶような大きな問題はなかった。事故ではないが，夜，具合が悪くなったなどの例もあり，宇都宮市内なので，保護者の方が夜迎えに来たことはあった。小学校４年生が，夜「おなかが痛い，頭が痛い」などと言っていたが，実はホームシックで，お母さんの声を電話で聞いたら治ったということもあった。
小林委員　：　大きな事故が起きるということを心配して活動を考えているというわけではなくて，活動そのものは非常に重要だと思うので，大きな事故が出てないということは，自信を持ってやっていっていいことである。
佐藤委員　：　ソロキャンプに関心がある。先生がいないとソロキャンプはできないということだと思うが，５回ということは，５校の学校がやったということだろうか。
事務局　：　はい。
佐藤委員　：　１７５人が参加しているので，単純計算して１回あたり３５人。一人用のテントは数に限りがあるということで，３５人ぐらいが１回にやるには適切なのか。
事務局　：　はい。
佐藤委員　：　ソロキャンプをやる場所は園内だと思うが，どの辺りの場所で，時間はどのくらいか。一昼夜だと思うが，夕食の後からやるのか，または，夕食の前からテントを設営して次の日の朝食までなのか。時間設定を教えて欲しい。
事務局　：　先週も中学校でソロキャンプを１泊やった学校があった。そのときには，生徒が１６名，先生は１名だった。場所は，ロッジの南側の一番奥の離れた場所がソロキャンプのテントサイトとなっている。学校がやるときには，必ず１名以上の先生に近くで寝ていただきたいということをお願いしてやってもらっている。先週の例だと，生活班で１名ずつソロテントで寝る人が選ばれて，行っていた。先ほど３５人という話があったが，クラス単位で実施すると１回あたりの人数がそんな数字になる。

古口委員　：　チャレンジハイクの中のストレートハイクで，コンパスを持たせて登山するとあったが，どのようなコンパスを使っているのか。また，見えないところには指導者がいたりしてやっているのか。

事務局　：　ストレートハイクをやるときに，学校の先生方が一番心配することは，「子どもたちだけになってしまって大人の目が届かない」こと，「途中で本当に大変なことがあったら」ということである。子どもたちには，「自分たちだけで行くんだよ」という話をするが，実は中腹にこちらの職員がいたり，頂上に担任の先生にいていただいたりと，大人の目で途中途中，確認をしながらやっている。コンパスの件は，子どもたちには，とにかく「まっすぐ頂上まで登っていくんだよ」と言う。コンパスは出発地点で頂上に合わせると，途中でも自分がどっちに行ったらいいのかわかるようなコンパスを使っている。ただ，山の中に入ってしまうと，コンパスを頼りに進む方向を決めるというよりも，多くはみんなでまっすぐ高い方に登るんだという気持ちで登っているようだ。頂上に先生にいていただくのは，途中で山頂っぽいところがあるので誤解を避けたいということと，子どもたちは不安な中で登っていると思うので，一番ほっとしたところに，ほっとできる先生にいていただくことが，ゴールという気持ちを味わえる一番の方法であると思うからである。

神長委員　：　２ページのプログラムを見て，これだけあるんだなと思った。こういうプログラムが現在あるということは，センターのホームページなどで紹介しているのか。また，プログラムを開発するときには，先生方の希望を聞いてやるのだと思うが，学校の利用者のニーズに合わせて，こういうニーズがあるなら，こういうプログラムを設けようということもあるのか。というのは，うちの職員が「こんなきれいな空があるなら天体望遠鏡を持っていって見せたいんですよね」と言っていた時にプログラムにあるかどうか調べていた。いつくか望遠鏡があれば，お借りして子どもたちに自由に見せたいなと思った。いろんな意味で要望に合わせてやりたい，かといって（活動の実施回数が）０ばかり何年か続くと，結果としてやめるかということになるかも知れないが・・・。ニーズに合わせたプログラムの開発はどのようにやっていくのか。

事務局　：　ご指摘ありがとうございます。一つ一つの活動についての概要を書いた「サポートカード集」というものがある。これを学校に配っている。もう一つは，教育情報システムにも載せてご紹介している。活動のプログラムを作る際に，小学校については，こちらに学校の先生方に研修で来ていただいている。事前に学校が２日間の中で，または中学校でいうと４日間の中で，「主に何をねらうか」ということと，「子どもたちの実態」について，調査用紙を提出していただいている。私たち職員は，紹介している活動については知っているつもりだが，先生方の思いやねらい，または子どもたちの実態については知らない。学校の先生方にとっては，それが逆になる。２日間，４日間の活動を作るときに，それがお互いに共有できて２日間，４日間の活動ができたらいいと思い，事前調査を行っている。小学校については，ここで行う研修会で担当の先生と，活動について話し合いをしている。中学校については，こちらから学校の方に伺って，学年の先生方と，小学校と同様のやり取りをしながら，４日間の活動について一緒にこちらもお手伝いをさせていただきながら，活動のプログラム作りをしている。そんな話し合いの中で，先ほど神長先生に言っていただいたように「夜の星についてはどうなんだ」ということや，「実はこんな活動をやりたいのだが，冒険ではどんな対応をしてくれるんだ」などの話題も出る。一つ一つの学校のニーズにオーダーメードのような形で対応できたらいいと思っている。このプログラム集に載っていないものでも，新しい要望があって，それが他の学校にも一般化できるものであれば，職員の方で相談をしながら，適宜増やしていければと思っている。

五十嵐委員：　子ども達の活動に関して写真（スライド）を見る限りでは，学校でいろいろ楽しくやるのはいいなと思う。危機管理，安全管理のことに関してお訊ねしたい。土日などで（園内に）入ってくると，一般のお客さんたちがアスレッチクで遊んでいる。そのときの安全管理や危機管理についてのマニュアルがもしあれば，次回にでも見せていただければと思う。また，学校利用の場合，土日で一般のお客さんが入ってアスレチック感覚で遊んで，火曜日に子どもたちが来たときに，その前の安全点検などは行われているのか。さらに，金曜日に中学校が帰ったあと，土日の一般利

用が入る前にどの程度の安全点検を行っているのか。１４年目ということでガタがきていると思うが，バックフライングなんかは作りかえられていたように思う。しかし，前のバックフライングがそのまま残っていたように思う。撤去となるとお金のかかることになると思うが，撤去に関して何かお考えがあるか。安全点検はどの程度の頻度で，どんなことが行われているのか。

事務局　：　ご指摘ありがとうございます。公園なので，一般の方から電話で「子どもが遊べるような遊具はありますか。」という問い合わせがたくさんある。イニシアティブゲームの施設については，「一般の方がちょっと来てやれるようなアスレチックとは違い，それなりのノウハウを知らないと，子どもが来てすぐ楽しめるようなものではない。」という話をさせていただいている。以前，あそこには「イニシアティブゲーム」という看板があって，一つ一つの活動について「こんなふうにやれるんだよ。」というような，一般の方がすぐ食いつけそうな看板を設置していた。しかし，私たち職員で安全管理について考えたときに，逆にそんな紹介をすると，一般の方たちが気軽にやってしまうのではないかという危惧から看板を撤去したという経緯がある。では，一般の方たちが実際にイニシアティブゲームをやりたいときにどうしたらよいかというと，リーダーバンクという「一般の方たちが希望すれば，支援のノウハウを知っている方を紹介して，イニシアティブゲームのきちんとしたやりかたについて支援する」という制度を紹介している。では，連絡もなしに来た一般の方たちが，ロープを使ったらどうなるかということになるが，イシニアティブゲームの道具を含め，園内の施設全体に対して１ヶ月に１回安全点検を行っている。学校がその活動をするときには，活動の前に１回１回安全点検をしている。全体の老朽化については，予算もあるので，所長から話をいただく。

所　長　：　１４年たつと，こんなに木のものは腐っていくのだなと実感している。予算が獲得できるものについては，順次修理している。予算がつかないものに関しては，職員の手によって自分たちで修理している。

五十嵐委員：　学校は，それなりの活動をやっているので，けがは仕方ないと思うが，一般利用の方のけがに関しては，損害賠償ということもからんでくるので，金曜日のあとの安全点検はやるのかということ。学校利用の前はやるが，終わったあと一般利用に対してはあまりしていないのではないかと思った。また，この間，子ども会で来てけががあったときに，看護師さんがいないと言われ，てシップだけもらった。休暇の問題もあるのでなかなか難しいと思うが，一般利用がまるっきりないということでもないだろうし，こういう時代なので考えてもらえれば。

所　長　：　ご指摘のとおり，学校が利用する前には安全点検をやっているが，終わった後の確認は，正直手薄だなと思っている。看護師の配置については，学校中心の配置なので，土日については，いない日もある。一般について１００％の看護師の配置はできていない状態である。非常勤嘱託員なので，勤務の問題などもある。火曜日から金曜日の学校利用に関しては１００％対応しているが，土日，夏休みなどの一般利用については，看護が休みの場合もある。

沼尾委員　：　今年，登山道の標識をつくるということで打ち合わせがあった。地元の人たちと晃陽中の生徒が冒険センターで作業をやることになっていた。しかし途中から，他の人たちに作業をしてもらいたいという要望があった。その後どうなっているか。

所　長　：　商業観光課が中心になり，登山コース全てについて看板を見直すということになっている。センターの方は間接的であり，看板を作るときの場所，看板をつけに山に入るときの人の配置を依頼された。作る過程においては，商業観光課が中心なので，センターの方ではまだ何も連絡を受けていない。至急確認し，分かりしだい連絡する。

議　長　：　今のお話は，ハイキングコースの話ですか？

所　長　：　商業観光課の予算で，全部新しくしてくれるということになっている。

沼尾委員　：　下地調査の依頼を受けて登山コース全部を歩いた。事前調査をやったが，途中から市の商業観光課がやるということになった。晃陽中の子たちとやることになっていた。途中でどうなったのかなと思って。

所　長　：　地元の子どもたちでつくらせようという話がありましたね。確認してみます。

議　長　：　請け負い業者に回ってしまったと・・・。他にいかがでしょうか。

沼尾委員　：　安全のことに関して，コースを歩いている人は分かるが，昨日，今日と連日のように新聞報道にも出てきているが，いのししが大変多い。人的被害は直接ない。向こう（いのしし）が危険を感じたときには，ありえるかもしれない。対策としての予算などは，地元の方では，資格を取る人に対しての補助はあるが，具体的に対策のための補助は出てこない。行政としての具体的な対策が出てきてない。また，正確な情報ではないが，熊について，今年上河内の羽黒山の方で見たという人がいる。昨年，熊が出たときも上河内での熊の目撃情報の方が早かった。地域情報としては，歩いていて熊に直接出くわしたという情報はない。具体的になったらもう少し情報を提供したい。

川口委員　：　昨年の大網に出た熊に関しては，聞いているが，今年になっては聞いていない。行政的には，今度の元気な森づくり県民税の中で，獣害対策の森林の整備，里山の整備などもあるので，そういう話があれば，市の方に相談していただければ。獣害対策の場合は特に，農作物に対する被害を対象としている。是非，ご相談していただきたい。

小林委員　：　ハチはどうか。

川口委員　：　ハチの対策はやってない。以前，篠井小学校の通学路に，スズメバチの巣があるからとってくれという要望があって，業者に聞いたら，結構高かった。予算がないので，自分たちでとったということがあった。ハチ対策の費用はない。

沼尾委員　：　（ハチが心配される時期は）これからですよね。

川口委員　：　そうですね。うちの職員も今年，場内でスズメバチに刺された。ハチの巣を踏んでしまったようで。大事には至らなかったが，ひどい時には，ショック死ということもある。

古口委員　：　ハチについては，下見のときに十分気をつけてみるということで。情報ということで，昨年秋にファミリーキャンプのときにこちらにお世話になったときに，「勇気のどうくつ」の中で，ヘビがいまして，子どもが半泣きになってしまった。マムシはいないですよね。

沼田委員　：　いる。かまれても，マムシは，第一病院に血清があるから大丈夫。

川口委員　：　スズメバチは，襲う前に必ず威嚇をする。カチカチカチカチという音を出して威嚇する。威嚇音を聞いたら逃げるようにする。また，ハチは，頭などの黒い部分を襲う。あまり黒い服を着ないようにするとよい。

沼田委員　：　ハチも第一病院でやってくれるので大丈夫。

古口委員　：　二度目に刺されると，抗体ができているので危ない。

沼田委員　：　２回３回は刺されない方がよい。１回なら大丈夫だが。

議　長　：　平成２０年度の学校受け入れ事業報告に関しては以上でよろしいでしょうか。

①　平成　２０年度事業報告について（イ　主催事業，ウ　利用状況）　・・・資料　1

事務局　：　（資料にそって説明）

議　長　：　平成２０年度の主催事業，利用状況についてのご報告がありました。質問のある方はお願いします。

森川委員　：　自然体験活動指導者養成研修会について，一般の方だと思うが，１８歳以上の方が５名参加ということだが，毎年減っている感じがする。実際研修会をやって，資格を取った方のその後はどうなっているのか。

事務局　：　実は，そこについて私たちも理想と現実は違うなと実感している。この主催事業は，日帰りで１日と，１泊２日の計３日間で行っているが，全て参加していただける方ということで募集している。そんなしばりがあるせいか，最近は参加者が少ないことが多い。参加していただいた方のその後については，リーダーバンクに登録していただいて，必要があれば来ていただけるという形をとっているところだが，なかなかそういう方が少ないのが現実である。登録はしていただけるのだが，受講されて積極的に主催事業に来て手伝ってくださっている方は１名である。そういう方が増えていけばと思っている。ここのところの雇用の問題や社会情勢などの影響でなかなか余暇の時間が取れないなどの事情があり，こちらが思っているほど，または受講された本人が思っているほど，こちらに来ていただける時間がないのが現状で，残念だなと思いつつ，これといった打開策が見つから

ないところでもある。

五十嵐委員：　主催事業と人数のこともあるのだが，毎年だいたい同じ事業が同じ時期に行われている。うちも子どもを連れて家族ふれあいキャンプに来たいと毎年思っているが，毎年同じ時期で，運動会や地域の行事と重なって参加できない。リピーターを大事にするのか，新規獲得を大事にするのかという問題もあると思うが，CONE の時期もだいたい同じ時期ですよね。主催の事業もある程度の年数を行っているので，時期を組み替えてやってみるとか・・・。「今年も行きたいんだけど，今年は行けないわ。」という人がいる反面，「今までだめだったけどこの時期ならいけるぞ。」という人もいると思う。毎年同じ時期に同じことをやるのは，プログラムを組むときには非常に簡単なことだが，時期をずらして開催してみるという方法をとってみて，それでもやっぱり参加者が減るということであれば，また元に戻してもかまわないと思う。残念ながら，冒険キャンプにしても，ふれあいキャンプにしても，来たいと思っても，学校行事と重なったりすることがある。どうしようと手をこまぬいているのであれば，日にちを思い切って変えてみるのも一つの手だと思う。５月の後半は，運動会があるのでなかなか参加できないという人は，６月の後半は来やすいのかもしれない。冒険キャンプにしても，このところ実施時期がお盆中で，お盆中はちょっと子どもを出せないなというのがある。宇大の学生とのからみがあるのかもしれないが，その点を少しいじってみるのも一つの手かなと思う。

事務局　：　ご指摘ありがとうございます。いろいろな主催事業の中で，たくさんの告知をして応募をいただいているのだが，受け入れ数について，こちらもできるだけ質を落とさないようにということと，または，施設のキャパシティーの関係からやむを得ず抽選をする場合がある。抽選をする場合に，昨年，今年の取り組みとしては，できるだけ新しく応募してくれた方に来ていただこうという形でやっている。新しく応募してくれた方を選んでしまって，そのあとに何回も来ていただいている方を抽選するという形で，新しく応募してくれた方たちが参加しやすいような形をとっている。時期については，たとえば，家族ふれあいキャンプであるとか，冒険キャンプであるとか，１１月にあるフェスティバルなど，できるだけいい時期にやりたいというのがこちら側の願いである。いい時期イコールどの方が主催事業を考えるときにもいい時期となる。それなので，重なってしまって「本当は行きたいんだけど・・・。」という方にご迷惑をかけてしまっていることも現状である。今，ご指摘いただいたように，時期についても可能な範囲で見直せる部分については，職員の方で検討しながら，新しい方が参加しやすい形で取り組めたらと思っている。フェスティバルについては，一昨年度，１１月の第１週の日曜日にやったときに，宇都宮市内でいくつか大きなイベントがあって，重なってしまったということがあった。そんなことがあったので，昨年度と今年度は，フェスティバルの開催時期をずらしたという経緯がある。他のものについてもそんなことが言えるのかどうか，検討をしたり，周りの情報を仕入れたりしながら今後の計画に役立てていきたいと思う。

若林委員　：　プログラムを拝見して，こんなに項目があって，正直びっくりした。その中で，これだけ危険度の高いもの，難易度の高いものもあるのに，事故も起きなくて救急車も呼ばなくてすんで無事やっているというのは，相当職員の方のご苦労があるのかなと思う。ちょっと残念なことは，グラフから判断するのは危険なことかもしれないが，「自然への感性」というものが，冒険センターでの活動の趣旨で大きな部分を占めるものであると思うが，「自然への感性」が，小学生中学生ともに，センターに来たときは高い。しかし，１ヶ月ぐらい過ぎたら，以前よりは多少あがっているけれども，かなり低くなっている。確かに自然に接する機会も限られた時間内になってしまうかも知れないが，もう少し，自然を対象にした，意識の向上心をあおるようなものをプログラム上に組めればいいかなと思う。確かに冒険というものに小学生，中学生ともに気持ちがあるでしょうけれども，危険性を非常に伴うということからすると，もうちょっと自然に親しむものもあればいいのかなと思う。「リーダーシップ」「対人関係スキル」「自己成長性」についてデータを見ると，中学生は目を見張るものが結果として出ている。冒険センターのプログラムは，ちょうど成長期の中学生にとって非常にすばらしいものであると思う。先ほど，安全管理の問題も出たが，同じタイプのプログラムをやるとややもするとマンネリ化する。油断も多少出てくる可能性もある。安全管理の徹底をし，こ

のままもっと面白いプログラムを開発していってくれればと思う。

事務局　：　ご指摘ありがとうございます。昨年度，救急車を呼ぶような大きな事故はなかったという話をしたが，今までには救急車を呼んだような大きな事故があった。昨年度はなかったが，私が知っている範囲で，けがによるものが２回，また，夜間，喘息の発作ということで救急車を呼んだが結果的に過呼吸だったということもあった。けがについては，自転車で転んでしまったもの，もう一つが骨折。そんな例がある。アンケート調査の「自然への感性」については，具体的に次のような４項目で聞いている。「自然と人間の生活には深いかかわりがあると思う。」「自然の中に行くと新しい発見がある。」「自然の中の活動は気持ちがいい。」「草花や自然の景色を見て感動することがある。」の４つの項目について，自分は「当てはまる」のか，「ちょっと当てはまる」のか，それとも「ぜんぜん当てはまらない」のか，ということで聞いている。一度上がって，その後落ちてしまうということについて，一緒に研究をしていただいている大学の先生とも話し合ったことがあるが，この「上がって下がる」というのは，普段の生活の中では，あまり自然に親しめるような環境，または時間が少ないのではないか，そんな理由から，上がるけれどもまた日常に戻るとちょっと下がってしまうのではないかと，そんな解釈をした。

議　長　：　所長さんの方から何かありますか。

所　長　：　１１年勤めているが，骨折は１年間に平均して３件くらいはあったかと記憶している。活動中が１，２件，あとは生活場面で，夜，階段を走って転んだなど。骨折が一人もいないという年は，ほぼなかった。救急車を呼んだというのは，マウンテンバイクで思いっきり転んだ子がいて，そのときと，あとは，職員が後頭部を強く打ったときの２件。そういう場面（活動中のけがの場面）を経験した人が，他の職員にも状況を知らせるなど，お互いに情報を共有しながら安全に注意してやってきた。

小林委員　：　学校の日常生活の中でも，骨折は毎年ある。

議　長　：　十分配慮していきたいですね。

②　平成 ２１年度事業計画について・・・資料　２

事務局　：　（資料にそって説明）

議　長　：　それでは，平成 ２１年度事業計画について，ご質問，ご意見ありますか。

入江委員　：　家族で日光へ遊びに行き，竜頭の滝の付近を歩いて観察しているときに，大きな木の枯れ枝が２ｍ先に急に落ちてきた。１年生の子と２歳の娘を抱いていたが，一歩間違えて子どもに当たっていたら頭蓋骨骨折ということになっていたかも知れない。もしそうなったときにどうするんだろうと思った時に，危険を察知する力というか，なんでも信用して入っていくのではなく，周りにどんな危険があるか，開放されているからといって無造作に行くのではなくて，起きてしまったことは，だれの責任にしたとしても，やっぱりわが子がけがしたら困るし，危険を察知する力というのは必要だなと思った。北海道の山で大人数の方がなくなった事故もあった。ガイドさんを信用しすぎるというか，やっぱり結局自分の身は自分で守らなくては，何か起きてしまって命をなくしてしまって，訴訟問題とかいろいろあったとしても，困るのは自分だし，結局のところ，自分の身は自分で守らなくてはならないんだなと考えることが最近多い。今の時代の考え方は，あまりにも過保護というか，事前に危険なものをなくしてしまい過ぎて，子どもが「こういうことをすると危険なんだ」というような痛い目に遭わないことが多すぎるように思う。公の施設として一般にも開放しているので，施設の整備とか安全面はちゃんとしておかなければならないとは思うが，冒険という名前が付いているわけだから，活動中の多少の擦り傷は仕方ないと思う。骨折だって成長期であればあっという間に治ってしまうものだと思う。だいぶ大きくなってから大きなことがあって困ってしまうよりは，大けがじゃない限り経験は大事だなと思う。子どもたちは痛い目にあわないと，分からない。親が勉強しなさいといっても勉強しないのと同じで，何のために勉強するのかとか理由が分からないとできない。親が過保護すぎるのではないかと思うことが多い。冒険センターの活動のチャレンジハイクでも，持ち物とか装備を最初から与えるのではなく，１回やらせてみて、痛い目にあった

としたら，帰ってきてから「軍手をしていかなかったら手が痛かった」とか，失敗したことなどを意見交換させ，「じゃあ，いったい何を準備しておけばよかったのかな」とか，何が必要だったかを考えさせ，２度目のチャレンジをして，「こういうふうに全部持っていったから痛い目にあわなかった」など，自分で必要な物を考えるとか，そういう力をつけるのも，冒険活動センターは，いい場所なので必要かなと思う。新しいプログラムに，そういうような子ども達に考えさせて活動できるプログラムがあればいいのではないかと思った。経験は，自信をつけるにはいいものであるが，最近の子供たちというのは，雨が降ったら親が学校に送っていくのが当たり前になっている。雨が降ったときに，靴がぬれて学校で靴下がぐじゅぐじゅで気持ち悪かったとか，そういう経験をしたら，「雨が降っているときには長靴はいていこうかな。」とか，「靴下の替えを持っていこうかな。」とかそういう知恵がつく。一回不愉快な思いや痛い思いをしないと，親が口で言ってもその時は分かるかもしれないけれど，後で忘れてしまうものだから，そういう経験をさせる場所として，冒険活動センターに，ぜひ，面白い活動を新たに加えてくれるといいなと，皆さんの安全面のお話を聞いていて思った。また，ロッジの一般利用者のアンケートのまとめで，黒丸のマイナス面と書いてあるところで，「ロッジの階段は歩きにくい」とか，「車の乗り入れを許可して欲しい」，「ロッジまでの荷物運びが苦労した」などあるが，冒険活動センターは，便利であってはいけないのかな，不便を楽しんでください，と思うので，こういうのは，ぜんぜん気にしなくていいかなと思う。考え方の問題かとは思うが，いろんな経験をさせて，経験したことは実になると思うので，新しい活動にどんどん入れてもらえたらと思う。

森川委員　：　危険予知について，今の若いお母さんたちは，子どもたちに危険予知について教えることを日ごろの生活の中でしていない。例えば，車に乗っていて子どもを降ろすときにも，車道に止めて，道路側から子どもを降ろしてしまう。ちょっとした生活の中でもやってないから，「危険予知ができるようなトレーニング，体験を」ということに賛成である。

入江委員　：　冒険活動センター以前の問題で，子育てを振り返ったときに，ある程度転んでけがするのとか，けんかではないが，何かあるとすぐ止める。どれだけたたいたら，どれだけ痛いかとか，やってみないと相手がどれだけ痛いか分からない。きれる子どもがいるけれど，どれだけやったらどれだけ痛いか知らないから，いきなり爆発してしまう。中学校でも，小学校でも，カッターナイフで刺すとか。自分でカッターで手を切ったことないのかなと思う。「多少のけがやけんかは止めない方が経験だよな」と思うけど，公園に行くと，「これしちゃだめよ。」とやる前に止めてしまうから，どうなのかなと思っていて，いろいろ考えるところがある。

古口委員　：　県のキャンプ協会では，十何年自然型体験キャンプということで山の中で，電気もない，水道もないトイレもない，ガスもないところで，子どもたちでキャンプをさせている。子どもたちの来たときと帰るときの顔は全然違っている。なかなかそこに出してくれる親は少ないのだが・・・。危険につながる安全配慮はしなくてはならないから，源流探検とかで山の川の先まで源流探検などをやるときには，必ず前もって見に行き、安全を確認する。先ほどの学校のアンケート調査の中で，なかなか生活で自然に触れ合う機会がないというのがあったが，家族ふれあいキャンプとか，冒険キャンプとか参加希望者が多いので，新しい方を増やすというのも分かるが，もう少し実施の回数を増やせないかなと思う。冒険キャンプも小学校４年生以上というのがあって，いろんなイベントで，対象が４年生以上というものが多い。低学年対象のものがなかなかない。年長さんから１年生までのキャンプをお手伝いしたことがある。プログラムの工夫の仕方で，１泊で，ナイトハイクもしたし，そんなことを取り入れられたらよいのではないかと思う。冒険活動センターの目的というのは，小学生だけじゃなくて，子どもたちということだと思うので，もっと小さな子どもたちにもそういう場が設けられたら，危険回避の力にもつながっていくのではないかと思う。検討していただけたら。

五十嵐委員：　学校利用に関してだが，新しいプログラムとして「ＫＹＴ」を取り入れたらどうか。１時間のＫＹＴを義務付けるとか。先生方はＫＹＴと言われてもご存じないと思うが，学校生活の中でのＫＹＴの考え方は十分活用できると思う。ここのセンターでやるいろいろなプログラムに関して，例えば，

ここでのＫＹＴをプログラムの中に取り入れていくことだけでも，危険予知，自分の身は自分で守るということがやれるのではないかと意見を聞きながら考えた。ＫＹＴがセンターのプログラムの中に入れられるか。学校利用に関しては重要ではないかと思う。また，新しいプログラムに関して。もっとあってもよいと思う。また，前にあってなくなったのかも知れないが，環境教育的なプログラム。「環境教育」というと先生方は，拒否反応を示すが，「エコプロジェクト」となると，同じことをやっていても「お～，エコですか」となる。例えば，ネイチャーゲームにしても，カモフラージュは，昔は木にロープを張ってその周りをぐるぐる回っていた。そうすると絶対的に道ができてしまって自然を破壊する。杉板焼きで，「この杉はね，間伐材を使ってやっているんだよ。」など講釈を入れてエコに結び付けていくなど。例えば，プログラムに☆印でもつけて，「☆印が付いているものはエコプロジェクトである。」とするのはどうか。また，篠井の方たちと協力して，間伐をしながら箸を作るなど。エコということをそろそろ冒険活動センターも取り入れてもいいのではないかと思う。エコを学校に取り入れていくことで，もっと活動が広がっていくのではないかと思う。現行のプログラムの中にも，エコとして考えられる部分もたくさんあると思う。自分たちで活動をしていて自然を壊してしまった時に「壊してしまったね。じゃあ，どうしようか。」と考えるというエコもある。是非考えていただければと思う。

議　長　：　今，お話に出てきたKYTというのは，危険予知トレーニングということですね。２１年度の事業計画についてその他よろしいでしょうか。

小林委員　：　この学校の割り振りというのは，どういう形で作っているのか。ローテーションというのはどういう考え方でできているのか。

事務局　：　１５ページにある資料を参考にしながら，小学校，中学校をそれぞれ４つのブロックに分けて１年ごとにローテーションをしていくような形で割り振りをさせていただいている。事務局で案を作って，それぞれのブロック１名の校長先生，合計８名の校長先生に集まっていただく会議の中で提案し，校長先生のご意見を聞きながら，最終的な日程を決めている。

小林委員　：　４つのブロックで回しながら，その中でまた回しているということか。

事務局　：　はい。

議　長　：　他に何か，２１年度の事業計画についてご意見ご質問などありますか。

沼尾委員　：　主催事業について，地域の活用（人材，食材，自然）ということで，１４ページにある「魅力ある主催事業の展開」というところの「家族ふれあいキャンプ―篠井の秋を楽しもう―」で，「～地域の食材を取り入れた～」というのと，１６ページの１１月８日のフェスティバルについて。この下でうどん屋をやっているのはご存知だと思うが，今までは，食材を農協にお願いをしていた。昨年の秋から，あちこち取材をして，やっぱり地域の食材でやっていこうということで，基本的に地元の農家と契約を交わして地元の食材を使うようにした。ここで言っていることは，そのことと何か関係があるのか。

事務局　：　１４ページに載っている「家族ふれあいキャンプ―篠井の秋を楽しもう―」だが，篠井の秋を味覚と自然で楽しもうというテーマで計画している。実は，私は今おっしゃられたことについて知らなかったのだが，「味覚」については，篠井産のりんごときのこを考えており，直接生産者にお願いし，動いている段階にある。

沼尾委員　：　りんごもきのこも地元の業者なら結構である。

事務局　：　続いてフェスティバルについてだが，毎年地元の農産物をこちらに来園された方にご購入いただけるようなブースを作っている。もう一つ，一昨年度から，地元の「松寿会」の敬老者の方たちに，竹を使っての活動ということで，篠竹てっぽうと竹馬でご協力をいただいている。今こちらについても計画を立てている段階なので，またご協力をいただくことになると思うのだが，そのときにまた改めてご連絡させていただきたいと思う。

神長委員　：　今年の６月，本校も冒険活動教室を実施した。子どもたちは，学校にいるときの顔ではなくて，実に生き生きと大きく見える。３泊４日ということで，長い時間あるので，いろいろな活動ができると思う。魅力ある活動があれば，先生方もやってみたいと思う。登山を予定していたのだが，

雨で中止になってしまった。何をやったか聞いたら，「トランプをやっていました。」と。それをよしとする先生もいれば，全員がそうではなくて，やっぱりそういうのは持って行かせないで，友達とコミュニケーションをとることが大切なんだぞと。与えられたことをやっているのではなくて，せっかく自然の中にも来たわけだし。なかなか先生方は，準備は端折りたいという考え方なので。キャンプファイヤーの実施が３校と７校なんですね。初めの頃はほとんどの学校がやっていた。１０年前に引率したときなんかは，冒険なんだから，チャレンジなんだからということで，何やっていいか分からなかった時代なので，「歩いて行け。」と言われて歩いてきた。冒険ということがあるので，何にチャレンジさせるのかということがないとならないと思う。キャンプファイヤーがなかったので，自分たちでろうそく持って火をつけて，そこの流れのところに「一」「条」という文字を作って写真を撮った。そういうアイディアが自分たちの学校で出てきたならば，いろんなプログラムができる。学校独自の何かということができなくなってきて，「キャンプファイヤー，めんどうくさい。」ということで引いてしまったなという感じがする。利用状況については，中学校，小学校で６割ということなので，勝手な意見を言いますと，５年生の海浜をやめて，こっちにもってきて，５年生も参加させ，小学校４年生，５年生，中学校１年生とやっていけば，自然に対する興味というのも下がらないですむ。系統的なものもできるのかなと思う。１４年前は，菅沼キャンプに行って夏休み奥白根に登った。今やってくださいということになったら，多分，うまくいかないと思う。それだけ子どもたちの体力は落ちていると。それでいいのかなと思っているのだが・・・。いろんな意見を聞いて魅力あるプログラムの開発にさらに努めていただきたい。

議　長　：　２１年度の事業計画について締めさせていただいてよろしいでしょうか。

⑶　協議事項

①　冒険活動事業の充実　～利用促進について～　・・・資料３

事務局　：　利用促進について，協議していただこうと思っていた。１６ページをご覧ください。せっかくの機会なので，こちらを見ていただいて市民のレベルからその活動について魅力あるものなのかについてご協議いただこうと考えていた。ただ，今までの協議の中で，エコに関するテーマでの主催事業であるとか，冒険的な魅力ある活動の開発であるとか，今後の利用促進または冒険活動教室の運営についての参考意見をたくさんいただいたと思っている。もし，特にということがあればその他の部分で教えていただければと思う。

議　長　：　利用促進について何かアイディアがありましたらお願いします。

五十嵐委員：　もう少し，地元密着というか，地元の力を利用してはどうか。食材にしても，今話を伺っていたら，センターと地元の方で知らなかったという話だったので，かかわりが薄いのかなと思った。宇都宮と篠井とここの活動で協力していくのも一つの方法かと思う。地域のことをいろいろと調べられて，取り入れてはどうかと思う。

入江委員　：　子育て中のお母さんをターゲットにダイエット企画。小さいお子さんがいる母親には，子どもは子どもで預かってもらって活動して，お母さんはお母さんたち専用に普段家事ではしないような動きでリフレッシュしてもらって且つダイエットになればと。お母さんは子どもの面倒を見たり，注意したりすることが必要なので，お母さんはお母さんだけで自分のことを考えて，自分の体だけに集中してダイエットというか運動できるような楽しいものがあれば面白いのではないかと思う。

議　長　：　今まで視野に入っていなかったことですね。

佐藤委員　：　アウトドアをメインとしている活動センターなので，ダイエットというのはいいと思う。ちょっと飛躍して，「お母さんのためのアウトドア教室」とかそんなふうにしてやっていただければ，いいのではないかと思う。というのは，お母さんの中には，家庭生活をそっくりキャンプでも活かそうとする人がいる。キャンプのときにスイカを冷やすことになった。川が流れているからそこに冷やせばスイカは冷える。あるお母さんは，「リーダーどうしましょうか。冷蔵庫がないからすいかが冷えません。氷を買ってきましょうか。」と言っていた。私たちは，流れる水にさらしておけばス

イカは冷えるし，ジュースだって冷えるっていうことが分かっている。そういうふうに家庭生活をキャンプの中に取り入れようとする方が結構多いので，子どもたちの中にも，そういう感覚でいる子どもがいる。だから，アウトドアというものはどういうものであるかということ，家庭生活をそのまま取り入れるのではなくて，何もないところから工夫してやる生活だということをわかっていただきたいし，それを自分たちの体験の中に活かせるということは『生きる力』につながる。「災害とかがあったときに，どのようにして生きますか。どのように生活しますか。」ということだと思う。やはり，最終的には私たちがどのように生き延びていくかということにつながっていくものだから，必要なことだと思う。

議　長　：　自然と若いお母さん方という着眼点，今までにない新鮮な着眼点ではないかなと思います。

佐藤委員　：　勝手に付け加えさせていただくと，先ほど安全についての話が出たが，私たちは，キャンプの前には指導者を対象に必ず安全のための研修会をする。木を割るなたを持つときに，なたを持つ手に軍手をはめていいのかどうかとか，包丁はどのように使うのかということから入っていく。その研修会をクリアしなければ，キャンプの引率リーダーは，責任者となれない。一般の方を対象にしたときにはそこまで要求できないが，利き手に滑らないものを持つとか，そういう基本的な知識は必要でないかと思う。

議　長　：　他になければ，協議を終了したいと思います。ありがとうございました。